魔天創記　（壱）

ちゃすけ丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔天創記　（壱）

【Ｎコード】
Ｎ６１１６Ｙ

【作者名】
ちゃすけ丸

【あらすじ】
シンプルで王道、読み易い。
そんな作品を目指して執筆していきます。
天使や悪魔を題材に「剣士が悪魔を退治する話」となっています。
素人が書いたファンタジー物語なので、暖かく寛大な御心で、お手透きな際に読んで下されば幸いです。

〜mixiアプリより移転〜

登場人物

【レイヴァン】（２４歳・男）
最愛の人を殺した悪魔を追って旅をする剣士。
人並み外れた剣術と光属性の精霊術を操る。
正義感は強いが、素直に表現することは稀。
＞ｉ３５３９９―４４５４＜

【リル】（１６歳・女）
レイヴァンのことをご主人様と呼び慕う女の子。
黒猫に変身する能力を持つ。
子供扱いされるのが嫌い。
＞ｉ３５４０１―４４５４＜

【ブライト】（２４歳・男）
レイヴァンとは幼なじみで一緒に旅をしている力自慢の男。
よく食べ、よく遊び、よく寝るのが信条。
女好きがたまにキズ。
＞ｉ３５４００―４４５４＜

～１～

男が二人と女が一人。

わずか三人の一行だった。

大陸では人々を襲う悪魔と呼ばれる化け物たちが活発に活動しており、少人数での行動は自ら命を絶つことに等しいと老若男女誰もが理解している。

ことさら人通りの少ない山道は危険なのだが、彼らは臆することなく歩き続けていた。

一時間。

二時間。

黙々と地面を踏みしめる三人だったが、突然女が口を開いた。

女は非常に幼く見え、どちらかと言えばまだ少女のように見える。

両肩を露わにした黒いシャツに赤いミニスカートのワンピースを重ね着した彼女は実に愛くるしく、大きな瞳と肩にかかる金茶色の髪、そしてその髪に結ってある大きな黒リボンが印象的だった。

「ご主人様、リルは疲れたです。　次の町にはまだ着かないですか？　もう三日も野宿しながら歩いているです。　早くふかふかベッドの上でゆっくりと眠りたいです」

偏った語尾で自分のことをリルと言う彼女は歩き疲れた様子を見せながら、少し前を歩く主人の腕を掴まえて話しかける。

すると「この山を越えれば町があるはずだから、日が暮れる頃には着くだろう」と素っ気ない態度で答えが返ってきた。

「えっ！？　だって、さっきお昼ご飯食べたばかりですよ。　お日様もお空の真上にあるし！

……と、いうことは？

次の町に着くのは、まだまだなんですね……」

彼女は返事の意味を理解すると大きな息を吐き、彼の腕を掴んだ

まま項垂れトボトボと歩き続けた。

～ 2 ～

彼女の愚痴を聞いたからか、しばらくすると今度はもう一人の男がぼやき始めた。

彼は茶色い短髪で、背丈は主人と呼ばれる男よりも高く身体も一回り大きかった。

ゆったりとしたシャツとズボンを着込んだ彼は、たくましいその腕で大きな荷物袋を担いでいる。

「リルの言うとおり、俺も早く町に着きたいぜ。　久々に腹いっぱい飯を食って、酒を飲んで、そして可愛い女の子たちと楽しい夜を過ごしたいからな！

……レイヴァンだってそう思うだろ？」

「そうだな」

リルに主人と呼ばれ、体格良い男にも素っ気無い言葉を返した男の名はレイヴァンと言うらしい。

ロングコートをはじめ服装の全ては黒系統でまとめられており、金色の髪と瞳が一層際立って見える。

目鼻は整っていて結構な美男子だ。

三人の中で彼だけが腰に剣を携えていた。

「お前って奴は相変わらず返事が冷たいな。　気持ちがこもってない、気持ちが！」

「相変わらずなのはお前も一緒だ、ブライト。　たまに言葉を発したかと思えば、飯か酒か女。　それしか言えないのか？　よもや旅の目的を忘れた訳ではないだろうな？」

「誰が忘れるか。　だがな、俺はその三つの楽しみがあってこそ頑張れんだよ！」

二人は一瞬で剣呑な雰囲気を醸し出したが、幼なじみとして長年行動を共にしているのでお互いの考えは良く解っていた。

「レイヴァン、お前は真面目すぎる」

「お前は不真面目すぎる」

絶妙の間合いでレイヴァンが言葉を返すと、鋭く睨み合った視線は直ぐに柔らかくなる。

ブライトと呼ばれる茶髪男の笑い声が大きくなると、レイヴァンは笑いを堪えるように小さく肩を揺らした。

〜 3 〜

再び口を閉ざし歩き始めた三人だったが、先頭を行くレイヴァンは急に立ち止まり、次の瞬間には表情を引き締めていた。

少し先に見える森の茂みが、風の流れとは別にざわめくのが確認できたからだ。

そこに何かが潜んでいるのは間違いない。

「四匹いるな」

長年の経験と鋭い感性を持つ彼は、真っ先に悪魔の存在を感じ取っていた。

すぐに側にいた二人に声をかける。

「ブライトは右の茂みに潜む二匹を」

「任せてくれ」

「リルはしばらく下がっていろ」

「はいです！」

突然のことだというのに二人は慌てる様子を一切見せなかった。

レイヴァンの短い指示を慣れた様子で受け止めるとすぐに行動に移す。

ブライトは担いでいた荷物袋をリルに渡すと腰を落として構え、リルは袋を両手で抱きかかえて数歩後ろに下がった。

二人の様子を見届けたレイヴァンは腰に差していた剣を左手でゆっくりと抜いて構えた。

木々の揺れる音が次第に大きくなった。

「来るぞ！」

レイヴァンが叫ぶのと同時に、茂みから何かが数体飛び出して来る。

人間よりも一回りも二回りも大きく、茶褐色で泥にまみれた身体。

ひどく崩れた醜い顔、手には木を引き抜いて作った棍棒。

オークだった。

オークの知能は低く見境なく暴れては獲物を捕食する下級悪魔なのだが、単純な故にそれが最大の脅威でもある。

今も視界に入った三人を食料と判断し、食事にありつけると突進してきたのだ。

レイヴァンとブライトはそれぞれ二対ずつ襲来した悪魔を迎え撃った。

一匹目のオークがレイヴァン目掛けて飛びかかり大きな棍棒を振り下ろす。

巨体とは思えぬ予想外の素早い動きに一瞬目を見開いた彼だったが、紙一重でかわすと、すかさず反撃に移った。

土埃に紛れて側面に回り込むと、剣を真横に薙ぎ払う。

そして続け様に左右から斬り上げる。

あまりにも一瞬すぎてオークには何が起きたか解らなかった。

気がついた時には自分の右腕は切り落とされ、黒い血が地面に小さな池を作ろうとしていた。

痛みと怒りで吠えたオークは再度襲いかかろうとしたが、それよりも早くレイヴァンは追撃に動いた。

両足を斬りつけて行動の自由を奪い、腹に斬撃を食らわせる。

オークはうつ伏せに崩れ落ちて、小さく痙攣したままその場から動かなくなった。

～４～

二匹目のオークは、レイヴァンの隙を狙い背後に回り込んで棍棒を振り上げた。

知能が低いわりには考えた行動だったが、ちょうど一匹目のオークを倒し終えた彼は背後の気配に気がついていた。

すばやく剣を逆手に持ち変えると、振り向き様に剣をオークの腹に突き刺した。

相手がよろめいた隙に刺した剣は抜き、今度は力いっぱい腹を薙ぎ払う。

不気味な叫び声と共に二匹目のオークも崩れ落ちた。

レイヴァンが流れるような動きで二匹のオークを倒したのと同じタイミングでブライトも二匹目のオークの首をへし折っていた。

彼もまた余裕の笑みを浮かべている。

「ちょろいもんよ！」

「お前の戦い方は、相変わらず原始的だな」

「何を言う、男は何と言っても力だろ！　拳だろ！」

ブライトは笑いながら両手についた砂を払い落とした。

レイヴァンは四体のオークが全て瀕死で動けないのを見届けると剣を鞘に収めた。

そして後方で戦況を見守っていたリルに一言声をかける。

「後は任せた」

「はいです、ご主人様！」

大きく頷いた彼女は小袋から小石をひとつ取り出すと瀕死のオークに駆け寄り、その石を相手に向けた。

この小石は精霊石と呼ばれており、悪魔が弱ると何かに取り憑い

て生き長らえようとする習性を逆手に取った悪魔を封じるための道具である。

リルが短い呪文を唱えると、小石はオークを光に変えて吸収し見事な輝きを放つ宝石へと変化した。

彼女は宝石へと変化した精霊石を別の小袋へと移し入れ、袋の重みを感じて笑みを浮かべる。

「結構たまったです！」

「今回は移動距離が長く結構な数の悪魔を封じ込めて移動しているからな！　まとめて換金したら、相当な金額になりそうだ！　相当な金額ということは？　相当楽しめるわけで？

……否応にも、やる気と元気が湧いてくるぜ！」

「うんうん、ブライトの言うとおり元気が出てきたです！　ご主人様、こんな所に立ち尽くしていないで、早く次の町を目指しましょうです！」

オークと闘う前までは、まだ着かないのかと愚痴をこぼしていた二人だったが、これからの楽しみに想像を膨らませると急に活力を

取り戻したようだ。

リルは主人の手を引き、山道を走り出した。

～5～

リルとブライトが活力を取り戻したことによってレイヴァンたち一行は夕暮れ前に山麓の町に辿り着くことができた。

町に着くと元気な二人は換金を行うため競い合うようにギルドを目指す。

ギルドは精霊石を生み出した術士たちが設立した団体で、悪魔の情報提供はもちろん悪魔がらみの依頼の斡旋、宝石に変化した精霊石の買い取り、特殊な効果を持った精霊石や戦闘道具の加工販売を行っている。

その利便性からギルドは発足後瞬く間に大陸全土へと広まり、今ではギルドのない町はないと言われている。

この田舎町だって例外ではない。

レイヴァンたちは換金を済ませると、次は食事と寝床を求め酒場へと足を向けた。

「いや～、予想以上に質の良い石があったお陰で、かなりの金貨が

手に入ったな！　これで今夜は楽しめそうだぜ！」

「だめです！　ブライトはお金使うの荒いんだから！　リルがしっかりと管理するから、袋をこっちへ渡すです！」

道中ブライトが満面の笑みで金貨の入った袋を掌で弄びながら歩いていると、その横で見ていたリルが慌てて袋を取り上げようと彼に飛びかかった。

「な、なんだよ急に！　飛びかかってくんなって！」

「いいから早く渡すです！　早く！」

「……解ったから、爪を立てるな！」

背の高い彼は素早く袋を持ち上げて頑なに拒み続けたが、しつこく飛び掛ってくるリルに堪らず袋を手放した。

「ったく……」

「解れば良いんです」

勝ち誇った顔をしながら奪い取った袋を覗き込んだリルだったが、途端に頬を膨らませる。

「ブライトずるいです！　卑怯です！　今回、金貨五十枚あったのに、中には十枚しか入っていないです！　こっそり自分のポッケに移したですね！？」

「何のことだか」

「あ！　今、全力でほくそ笑んだです！　許さないです！」

「リル、それだけあれば十分に足りるんだから、そう騒ぐな」

彼女は再びブライトに飛びかかろうとするが、レイヴァンに窘められた。

主人に逆らう訳にはいかず思いとどまった彼女だが、どうしてもやりきれず「ご主人様はブライトに優し過ぎるです！」と叫び散らした。

～６～

金貨の取り分を話しながら歩いている間に日は暮れ、酒場に着いた頃にはすっかり夜になっていた。

早速中へと入ると視界に多くの人たちが酒を片手に騒いでいる姿が飛び込んでくる。

酒場もまたギルド同様にどんな町にもある大衆的な施設だ。

しかし、この町の酒場は何かが違っていた。

その違いに、いち早く気が付いたのはブライトだった。

「居ない！」

「居ない？」

レイヴァンとリルは急に声を上げた彼の横顔を不思議そうに見つめる。

「二人ともよく見ろよ！　若い女の子が居ないだろ？　あれに見えるも、これに見えるも、どう考えても俺たちより年上だぞ！」

ブライトに言われて、周りを見渡す二人。

じっくり見て、その様子に気がつく。

確かに、彼が言うように同世代ぐらいの女性が居なかった。

酒や食事を運んでいる給仕の女や、男達と一緒に居る女たちも年上に見える。

「どうやら、そのようだな」

「先日、大人の色気がどうのって言っていたじゃないですか。　夢が叶って良かったですね、ブライト」

「今は年下の若い子を相手にしたい気分なんだ！」

「……そんなこと知らんです。　何より、リルにはどうでもいいことです。　ご主人様、早く食事にしようです」

「そうだな」

「折角ここまでガンバってきたのに！　楽しみにして山を下りてきたのに！　何という酷い仕打ち。　こうなったら自棄酒だ！」

肩をがっくりと落として項垂れていたブライトは開き直ると空いていたテーブル席に着き、近くの店員を呼びつけると大量の食事を頼み始めた。

レイヴァンたちは彼がこうなると腹が満たされるまで止まらないことが解っていたので、彼と同じ席には着かず静かなカウンター席へと腰を下ろした。

～ 7 ～

席に着いた二人の前に白髪で身体の大きい男が現れた。

「いらっしゃい、何にする？」

そう尋ねられ、相手がこの酒場のマスターだと理解したレイヴァンは美味い物なら何でも良いと答え、リルは魚料理を注文した。

「……飲まないのかい？」

酒場に来て酒を頼まない客は珍しい。

自然な流れで質問をぶつけられると「呑むです！」とリルが間髪入れずに答えた。

「おいおい、お嬢ちゃんにはまだ早いんじゃないかい？」

「何言ってるですか！　リルはもう立派な大人です！」

リルは誰が見ても少女のように幼く見える。

飲まないのかと尋ねたマスターも質問の矛先はレイヴァンだった。

しかし、彼女は先日十六歳の誕生日を迎え、世間一般的には間違いなく成人の女性となる。

何より彼女にとっては子供に見られることが不満なため、小さな手で机を強く叩くと立ち上がって笑うマスターを睨み付けた。

「実に威勢の良いお嬢ちゃんだ！　気に入ったよ。　そういうことなら魚に良く合う上物の葡萄酒があるから出してやろう」

「そうこなくっちゃです！」

目を丸くして驚いたマスターだったが彼女の勢いに感心すると声に出して笑った。

リルもまた彼の一言で険しい顔が一瞬で綻ぶ。

「金髪の旦那はどうする？　あんたも何か呑むかい？」

「必要ない」

レイヴァンが即答すると、そのあまりにも無愛想だった言葉にリルが慌てて言葉を付け足した。

「ご主人様は、お酒を呑むと暴れるから呑まないようにしてるんです！」

「そ、そうか、なら無理には勧めないよ。　その腰にぶら下げた剣で店内を壊されても困るしね」

一瞬表情を凍らせたマスターは笑いながら裏へと入っていって、料理の準備に取り掛かった。

酒場のマスターといえば、カウンター席の前で酒を注いで客の相手をしたり、手持ち無沙汰に洗い終えたグラスを拭いているものなのだが、ここのマスターは自ら料理をするらしい。

若い給仕の女性も居ないし、人手不足なのであろうか。

コックに混じり奥で調理をするマスターを興味津々に見つめているリルの横で、レイヴァンは豪快に飲み食いしているブライトの様

子を見つめながら静かに何かを考えていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6116y/

魔天創記　（壱）

2011年11月27日23時50分発行